

令和4年度

教職員サマーセミナー実施報告書

令和5年1月

宇都宮大学教職センター

栃木県総合教育センター

はじめに

教職員サマーセミナーは、小中高校と特別支援学校の教職員を対象に、宇都宮大学教職センターと栃木県総合教育センターが共催する教職員研修です。宇都宮大学の教職員が講師を務め、事業費を宇都宮大学と栃木県総合教育センターが共同で負担して実施しています。小中高校と特別支援学校の教職員が夏季休業を利用して、今日的な教育課題についての見識を深めたり、教職に関わる教養を学んだりすることにより、幅広い教師力を身に付けることを目的としています。

新型コロナウイルス感染症拡大による全面中止を経て、昨年度（令和3年度）は感染対策を徹底した上で7講座（うちオンライン2講座）を実施いたしました。今年は、政府の「まん延防止等重点措置」が3月で終了し、4月からは大学の授業が全面的に対面で実施されるようになりました。今年度の教職員サマーセミナーも、7月から8月にかけての「第7波」に警戒して感染対策を徹底しつつ、12講座（うちオンライン3講座）の開講を予定し、すべて予定どおり実施することが出来ました。

今年度の申込者数は221人、受講者数は202人でした。189人の受講者が実施アンケートに回答してくださいました。このアンケートでは、回答者の98%から満足（とても満足＋やや満足）という回答を頂きました。今後も受講者に満足していただける研修機会の提供を目指して努力して参ります。

教員免許状更新制の廃止に伴い、現職研修の機会の充実が求められています。教職員サマーセミナーも栃木県教職員の皆様にとっての有意義な研修機会となることを目指して一層の充実に努めて参ります。関係各位には、引き続き御指導・御鞭撻を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和5年1月

宇都宮大学教職センター地域連携部門長

上原 秀一

目 次

【1】 講座名：調査結果からみる栃木の子ども・学校・学級-----	1
講 師：丸山 剛史	
【2】 講座名：子ども理解と授業力向上を目指して① —子どもたちが科学を楽しめる工夫や配慮— —発育期の運動発達—-----	2
講 師：出口 明子・加藤 謙一	
【3】 講座名：コロナ禍における調理実習の工夫 -----	3
講 師：カバリエロ 優子・赤塚 朋子	
【4】 講座名：教師も楽しむ理科実験 -----	4
講 師：南 伸昌	
【5】 講座名：子ども理解と授業力向上を目指して② —特別支援教育における ICT 活用— -----	5
講 師：齋藤 大地	
【6】 講座名：数学的に考える力を育てる授業づくり：数学的な見方・考え方の成長を 目指して【オンライン】 -----	6
講 師：日野 圭子	
【7】 講座名：日英語比較と英語文学の知見を活かした英語の授業づくり -----	7
講 師：岩崎 宏之・五十嵐 奈央	
【8】 講座名：言語活動を軸にした教育内容・方法論【オンライン】 -----	8
講 師：青柳 宏	
【9】 講座名：学校改革の実際と課題—SWOT/クロス分析を手がかりに学校の力を 掘り起こそう—【オンライン】 -----	9
講 師：小野瀬 善行	
【10】 講座名：障がいの重い子どもと係わり合う教育 —実践事例から読みとく特別支援教育— -----	10
講 師：岡澤 慎一	
【11】 講座名：ICT を活用して地球を探究する -----	11
講 師：瀧本 家康	
【12】 講座名：幼児・児童・生徒ひとりひとりの手持ちの力を尊重し育むための 教育を考えてみよう -----	12
講 師：石川 由美子・齋藤 大地	

附1：「令和4年度教職員サマーセミナー」アンケート

附2：「令和4年度教職員サマーセミナー」アンケート集計

【1】講座名：調査結果からみる栃木の子ども・学校・学級

講師：丸山 剛史

実施日：令和4年7月29日（金）

会場：8D11教室

受講者数：19名

I. 講座の趣旨

教育の歴史では「100年前どのような教育をしていたかわからない」といわれ、教育実践に関して記録することの重要性を聞かされたことがある。また、教育課程の基準としての学習指導要領は存在しても、学校の取り組みや子どもの状況は学校や地域によって異なっている。筆者はこれまで地域に焦点をあてた事例研究・調査に注意を払ってきた。自分でも調査は行いが、卒業論文・修士論文指導で地域の実態に関して調査することが少なくなかった。気がつけば、子どもの豊かな生活を意識した、生活・遊び、特別活動、学級経営に関する独自調査（子どもの遊びの希望と実際、子どもの労働・職業選択に対する意識、小・中学生のテスト観、合唱コンクール、教室掲示など）の結果がたまってきた。調査協力への御礼の意味を込めて、先生方の前で調査結果を報告し、栃木県教育の一層の発展に少しでもお役に立ちたいと考えた。

II. 講座の内容

講座では、公刊した報告文等を用いて解説を加えながら、時折、参加者に学校・教室の状況をお話いただき、交流、講話内容理解の深化を図った。教員間・校種間・地域間交流としてのグループ討議を多く行いたかったが、新型コロナウイルス感染再拡大の時期であったため、グループ討議は数を減らし、短時間とした。内容構成は次のとおり。

I. 子どもの状況

1. 子どもの遊びの希望と実際：埼玉県鶴ヶ島市と栃木県鹿沼市との比較
2. 不登校児童・生徒の出現率：栃木県中学校はワースト12位から落ちたことがない

II. 学校（学習・生活）

1. 小・中学生のテスト観とテスト答案添削・自己評価能力育成
2. 小・中・高校生の労働・進路選択に関する意識

III. 学級－学級経営

1. 教室掲示：掲示計画と教室掲示への子ども参加

「子どもの状況」では、子どもの遊びの「希望」と「実際」のズレ、などについて話した。これは地域づくりへの住民参加等で注目された埼玉県鶴ヶ島市と栃木県内のある自治体で調査したものであり、埼玉県鶴ヶ島市に関しては30年前の調査との比較も行った。ここでは、栃木県では調査対象者は2倍以上であったが、子どもたちの「遊びたい遊び」の

種類は鶴ヶ島市の子どもよりも少ないこと、などを紹介した。不登校児童・生徒の出現率に関しては、統計で確認できる限りにおいて不登校出現率は全国ワースト12位以内から外れたことがなく、調査を進めてみると家庭的な要因（ここでは詳論しない）が大きいと考えられることを話した。

「学校（学習・生活）」では、栃木県の小・中学生のテスト観、県内のテスト答案添削の教育実践事例、同じく栃木県内の同一地域の小・中・高校生の「働くこと」、職業選択に関する意識について調査結果を紹介した。小・中学生のテスト観については、小学校第4学年以上になるとテスト実施の目的意識（何のためにテストを行うか）が複合化していること、したがって小学校第4学年の児童に改めてテストは「自分自身を知るための道具」であることを強調する必要があるのではないかと問題提起するなどした。「働くこと」に対する意識に関しては小学生でも保護者の働く姿を見て、「働くこと」に対する不安をアンケートに記すなど、容易には解決できそうにない問題があること等を話した。

「学級－学級経営」では、いわゆる「掲示計画」の方針に関する市町による違いや、教室掲示物への子ども参加について、特徴ある市町、教育実践事例を紹介した。教室掲示の掲示物の種類や掲示する位置を詳細に規定する自治体もあればそうでない自治体もあるなかで、学級での係を子どもたち自身が考え、そうした係活動が基礎になり、係の掲示物を掲示するために児童が教員と交渉するようになり、こうした取り組みが積み重なることにより、児童が自主的・主体的になっていき、それが学習へも転化していくことを話した。

III. まとめにかえて

講座後のアンケートでは、次のような感想が寄せられた。

- ・「栃木県に勤務しながら、本県について知らないこともあり、データで見られて（知れて）楽しかったです。…」
- ・「子どもの様子や、特別活動等を研究データをもって説明していただきました。実態にもとづいたものであり、講話中に何度となく、うなずきました。今後の研究報告も楽しみにしております。」など。

明日の教育実践に役立つことを求める声もあり、筆者の至らなさを痛感した次第であるが、アンケートでいただいた声は忘れずに、今後の教育・研究活動に生かしたい。

【2】講座名：子ども理解と授業力向上を目指して①—子どもたちが科学を楽しめる工夫や配慮と発育期の運動発達—

講師：出口明子・加藤謙一

実施日：令和4年7月29日（金）

会場：宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校

受講者数：21名

I. 講義の趣旨

本講座は、理科分野と保健体育分野の教員が共同で子ども理解と授業力向上をねらいとして講義・演習等を行った。午前は出口が理科の実験に係る教材の紹介や指導方法、午後は加藤が発育期における運動発達の特徴と体育における観察学習の意義や教具の作成を、それぞれ担当した。

II. 講義内容

9:30～12:15【子どもの自然認識～科学を楽しむために～】

担当：出口

本講座では、子どもの「自然認識」に着目し、子どもが科学の学びを楽しむ活動を実践するためのポイントについて、実験を交えながら解説を行った。子どもたちが科学を楽しむためには、科学事象について興味・感心を持てるようにするとともに、子ども自らが主体的な探究を行えるようにすることが求められる。そうした主体的な探究は、教師が子どもの持つ自然認識に働きかけることから始まる。講座の中では「電気」を取り上げ、種々の実験を通して子どもの自然認識を意識した教材や教授方法について検討し、参加者同士のディスカッションを行った。全体の展開は以下の通りである。

I 科学の学びと子どもの自然認識

- ・科学を学ぶ／科学楽しむということの意義
- ・「自然認識」という考え方
- ・学校での理科の学びと自然認識
- ・子どもの自然認識への関わり方
- ・子どもの自然認識の事例

II 子どもの自然認識を意識した「電気」を中心とした教材研究～電気・エネルギーとは？～

- ・子どもの「電気」に関する自然認識を探る
- ・電気につくもの／つかないもの
- ・電気のする仕事
- ・電気をつくろう

III まとめ（ディスカッションと今後の展望）

- ・エネルギー概念の萌芽／SDGs との関連について

13:15～16:00【発育期の運動発達の特徴と体育における観察学習の意義】担当：加藤

近年の子どもの体力低下や教育に関わる問題点をあげながら、就学前から中学校の子どもの体育やスポーツ指導の意義について解説した。ビデオ観察を通して子どもの運動技能や運動学習やについて具体的に学んだ。また、手づくりフライングディスクやメンコなどを作成した。

発育期の運動発達の特徴を以下の観点をもとに理解を深めた。

I 体力からみた運動発達の意味

- ・現代の子どもの運動発達に関する問題
- ・体力・運動能力の考え方
- ・スキヤモンの発育曲線からみた発育発達の特徴
- ・保健体育からみた子どもたちが身につけるべきミニマムとは（巧みに身体を動かす身体能力）
- ・発育発達に見合った学修内容

II 体育における観察学習の意義

- ・観察すべきポイントの理解
- ・短距離走、前転、ボール投げの観察評価の実施（幼児や児童の各動きの観察評価を行い、観察後に評価についての解説から理解を深めた）
- ・体育の九九・ドレミとは？

III 運動発達を促進する運動遊び

- ・手作り運動教具の作成
フライングディスク、紙鉄砲、メンコ
上記3点の教具を使った運動遊びの紹介

III. 講座の自己評価と受講者のようす

【子どもの自然認識～科学を楽しむために～】

ディスカッションでは、「自然認識」という言葉や考え方を初めて耳にして、受講者自身が改めて自己の自然認識について考えたという声が多く聞かれた。数多くの実験体験を通して、楽しみながら子どもの自然認識を想定したり、教材や指導法について検討し合う姿が見られた。またその検討をきっかけとして、様々な校種に勤務する受講者同士が自身の現場の様子について紹介し合い、それぞれの実践現場の問題解決につながる意見交換も見られ、受講者にとって有意義な機会となっていたようである。

【発育期の運動発達の理解と運動の観察学習の意義】

子どもの運動発達の特徴を理解した上で、実際の子どもの指導現場での対応について質疑が行われた。VTRによる運動観察では、観察評価の意義や必要性を感じるとともに、その難しさも実感したようであった。今後は日頃から、子どもたちの様子や運動を観察することに関心を持つことを期待したい。また、手作りの運動教具では、童心に返って受講者も楽しめた様子であり、身近なものを使って運動指導をするきっかけとして取り組んでいたようであった。

【3】講座名：コロナ禍における調理実習の工夫

講師：カバリエロ優子・赤塚朋子

実施日：令和4年8月1日（月）

会場：調理実習室（峰キャンパス8号館2階）

受講者数：12名

I. 講義の趣旨

コロナ感染症の拡大により、感染リスクの最も高い活動とされている調理実習実施には、感染予防対策や安全への配慮が重要である。本講座では、感染予防を行いつつ実践的な学びにつながる調理実習例の紹介と教員間の情報交換を行うことを目的とした。また、当日は感染対策を行いつつ校種に応じた調理実習も行った。さらに、新学習指導要領の調理実習において考慮すべきポイントと校種間の違いについても情報提供を行った。

II. 講義内容

1. 新学習指導要領（調理に関して）

新型コロナウイルス感染症の拡大により、特に若い世代の食生活に変化が起きている現状をデータで示した上で、家庭科における調理技術が食生活の質に及ぼす影響と、調理実習の重要性をお伝えした。新学習指導要領調理分野において、小、中、高、特別支援学校で学ぶ内容と家庭科の時間数を説明した。最後に、家庭科における調理実習の意味について問いかけた。

2. コロナ禍における調理実習の留意点について

細菌、ウィルスの特徴と調理実習における感染、衛生面での留意事項について、具体的な実践方法について説明した。

3. コロナ対策&災害食の調理

コロナ禍でも実習可能なメニューあると同時に、災害食を想定した調理実習を実施した。シリコンバックを用いて、ご飯、ツナカレー、りんごのコンポートを調理し試食した。

4. グループディスカッション（調理実習の工夫、アレルギー対応）

午後は、以下の内容でグループディスカッションを実施した。

教育の現場で感じる子どもたちの食の課題。家庭科、食の分野で教えるのが難しいと思うこと。授業や実習で工夫されていること。各学校での調理の工夫。アレルギー生徒への対応をどうしているか？その他（自由に）

5. 全体ディスカッション

ディスカッションで出てきた意見や実践例をグループごとに発表していただき、情報と意見の共有を行った。また、宇大附属小、中学校、栃木県及び全国で実践されているコロナ禍での調理実習例も紹介した。

6. まとめ・アンケート

最後に、現代の食の課題、持続可能で健康的な食事に関する指針など、食分野における今後の取り組みについて紹介し、本講座のまとめを行った。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

以下、受講者アンケートの自由記述内容を示す。

コロナ禍での実習の工夫や、学習指導要領の小中高のつながりを理解することができ、とても学びが多かった。すぐに実践できる内容から理論的な内容までが研修内容に盛り込まれていて勉強になった。非常食としてのカレーライスの作り方を実験的に体験することができ、おもしろかった。他の学校の家庭科の様子を聞くことができよかったです。災害時の食の調理については考えたことがなかったので、勉強になりました。現在の現場での悩みにテーマがとてもあっていて、それに関する答えがたくさん得られた。普通なかなか他の先生と共有できない調理実習の情報について、たくさん知ることができたため。実習体験もできて、とても楽しかった。災害時の調理の仕方を学べた。家庭科の勉強の課題点を見つけられた。新たな発見があり学びの多い一日となった。自校で実習が実践できるか分からないが試したい。とても勉強になりました。自分自身が更新されました。実習もできたので充実していました。災害食ということで興味はあったけど、やったことがないことを行うことができ、とても良かったです。しかも思った以上においしくてビックリしました。自分でも勉強したいと思います。

受講者アンケートでは、満足が10名、おおむね満足が2名であったことから、実施内容は受講者にとって適切であったのではないかと考える。ただ、調理実習の段取り不足により、指示があいまいになったことは反省点であった。

本講座を実施したことで、より現場に即した内容にしていく必要があることと、入念な準備が必要であるということを確認したため、今後は、その改善に努めていきたい。

【4】講座名：教師も楽しむ理科実験

講師：南 伸昌

実施日：令和4年8月1日（月）

会場：共同教育学部理科棟3階 理科教育学学生実験室

受講者数：14名

I. 講義の趣旨

本講座では、身近な事象や素材を取り上げ、物事の見方を変えることによる理解の深まりを楽しんでもらうことをねらいとした。いろいろな学校種の、専門も異なる教員が互いに楽しむことができるよう、小中学校理科の「当たり前」を問い直したり、観測者としての自分をメタ認知したり、視点を少しずらすことにより視野が広がる楽しさを感じてもらえるように講座を組んだ。

II. 講義内容

1. ものの燃え方と空気

まずは安全教育として、アルコールランプやガスバーナーの炎の温度分布や安定性を実際に体験した。次いで、小学6年の「ものの燃え方と空気」に沿う形で、燃焼の条件について、知識に揺さぶりをかけながら、実験的に確認を進めた。

2. 気体の性質

2-1. 水素の発生と「軽さ」の確認

フィルムケースを用いた安全な水素発生装置を用いて水素の発生／捕集を行った。次いで、「軽い」水素が試験管からどのように抜け出ていくのか、受講生全体で予想・検証検証を進めることにより、気体が入れ替わる速さについての理解を深めた。

2-2. 酸素、二酸化炭素、水素の検出方法の確認

「線香を試験管内に入れると火が点く」「試験官の口にマッチの火を近づけると気体が燃える」という変化が、それぞれ酸素、水素のみに特有の反応であるのか予想して実験で確認し、その理由についてグループで検討した。

3. 虹の仕組み

虹は太陽光が空気中の水滴により屈折して「見える」光学現象である。白色光がどのように屈折することにより色ごとの強め合いが起こり、何故あのような色の配置が「見える」のか、「自分の目で見えるとはどういうことか」と

いうことを改めて確認することにより、理解を深めた。

4. 超簡単モーター

子どもの興味関心を高める磁力の教材として、超簡単モーターを配布した。作成した後、磁石の向きと回転方向を整理し、回る仕組みを考えさせた。

モデルを検証するために、磁力線の向きを知る必要があるので、棒磁石やNd磁石が形成する各種磁力線を、鉄粉を用いて描き、磁界が3次的に形成される様子を確認した。次いで、中学理科の発展として超簡単モーター全体の磁力線を描き、モデルの検証を行った。

5. ICT教材の紹介

力学の教材及びスマホ顕微鏡について簡単に説明を行った後、受講者の興味の赴くままに体験する時間とした。

5-1. 力学の相互作用型演示実験講義（ILDs）

ワークシートと演示実験を中心としたアクティブ・ラーニング型授業の一つであるILDsの、運動学や動力学の教具を紹介し、使い方の説明を行った。高校教員2名が興味を示し、一通りの動作確認を行った後、現場で実際に活用する際の留意点などについての意見交換も行った。

5-2. スマホ顕微鏡「ハンディ顕微鏡DX」

市販のスマホ顕微鏡や100均で購入できるスマホカメラのアタッチメントレンズの紹介をおこない、露草の気孔の観察例などを紹介した。前者を一人1台配布して簡易プレパラート作成法を紹介し、各自で試料を集めて観察してもらった。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

学びは本来楽しいものであるが、視点が硬直化すると楽しさが薄れてしまう。アンケート等の感想から、本講座を通じて、ありふれた実験も、掘り下げ方により興味関心を高める素材とできることを感じてもらえたようである。これからもなるべく多くの単元で「教師が楽しめる」よう、素材の開発を進めていきたい。

【5】講座名：子ども理解と授業力向上を目指して②-特別支援教育における ICT 活用-

講師：齋藤 大地

実施日：令和4年8月2日（火）

会場：宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校

受講者数：17名

I. 講義の趣旨

新型コロナウイルスの全国的な感染を背景に、GIGA スクール構想（GIGAはGlobal and Innovation Gateway for Allの略）による児童生徒への一人一台端末の配布が急速に進んだ。特別支援教育においては、障害のある児童生徒の学習や生活を支え促進するものとしてこれまでも ICT が活用されてきた。一人一台端末時代の到来によって、改めて教師主導による活用ではなく、学習者としての障害のある児童生徒が自分自身で学習や生活に ICT を効果的に利活用するための指導や支援が学校教育において強く求められている。

そこで本講座では、一人一台端末環境における効果的な活用の方法について、実際に端末を操作しながら体験的に学ぶことを重視することとした。

II. 講義内容

以下の4つの内容について、受講者に一人一台タブレット端末を配布し、体験的に学ぶように工夫した。午前中は(1)と(2)、午後は(3)と(4)を扱った。

(1) 特別支援教育における ICT 活用の基本的な考え方

「特別支援教育における ICT 活用について」（文部科学省, 2020）の資料をもとに、特別支援教育における ICT 活用の視点として、以下の2点を示した。

視点1：教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするために、ICTを活用する視点

- ・教科等又は教科横断的な視点に立った資質・能力であり、障害の有無や学校種を超えた共通の視点。
- ・各教科等の授業において、他の児童生徒と同様に実施。

視点2：障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服するために、ICTを活用する視点

- ・自立活動の視点であり、特別な支援が必要な児童生徒に特化した視点。

(2) 特別支援教育における ICT 活用の実際

主に知的障害特別支援学校における ICT 活用の実際として、中学部2年生 ASD の男子生徒に対する VOCA アプリを用いたコミュニケーション支援の事例について解説した。

また、視覚支援及び VOCA として優れたアプリである DropTap のハンズオンも実施した。

(3) 一人一台端末時代における ICT 活用の基本的な考え方

GIGA スクール構想に至った背景や GIGA スクール構想で求められていることなど、基本的な内容について解説した。特に一人一台端末時代の特別支援教育における ICT 活用の要点として、以下の4点を示した。

①一人一台

- ・学習上又は生活上の困難の改善のために使用

②クラウド前提

- ・学校で、基礎的な使い方を固める
- ・日常的に情報共有の方法を確立

③学校外での活用

- ・家庭と学校のシームレスな繋がり
- ・コロナ禍のような状況に備え、一人で学べる環境づくり

④才能を解き放つ

- ・新たな体験

(4) 一人一台端末時代における情報モラル

近年従来の情報モラル教育に代わるものとして注目が集まっている「デジタル・シティズンシップ教育」について紹介した。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者の教職経験年数の幅は広がったが、17名中13名が「とても満足」、4名が「やや満足」といったポジティブな結果であった。具体的な受講者の感想は以下の通りである。

- ・講義だけでなく実際に iPad を使用したり、実践発表があったりして、すぐに取り入れられる内容があったり、様々なアプリを操作したりできてよかったです。
- ・たくさんのアプリに触れることができ、とても勉強になりました。夏休み明けに使ってみたいと思いました。また、情報モラルの考え方も大変勉強になり、新しい考え方を私も取り入れていかなくてはと思いました。ありがとうございました。

講義の内容や扱ったアプリ等は基礎的なものが多く、受講者によっては物足りなかった可能性もある。したがって、今後開催する場合には、事前のアンケートを通して ICT に関する知識や技能についても把握することが必要であろう。

【6】講座名：数学的に考える力を育てる授業づくり

－ 数学的な見方・考え方の成長を目指して －

講 師：日野圭子

実 施 日：令和4年8月2日（火）

会 場：オンラインによる開催

受講者数：25名

I. 講座の趣旨

算数・数学科において、数学的に考える力の育成は、益々その重要性が高まっている。本講座では、数学的な見方・考え方に視点を当てて、その捉え方や授業における手立て、教師の役割などを考える。具体的な授業データも示し、子どもの問題解決活動をどのように解釈したり、促したりできるかについても考察する。また、グループワーク等を取り入れながら進めていく。話し合いを通して、自身の授業について振り返り、視野を広げる機会となるようにしたい。

なお、本講座は、教職大学院の授業科目『算数・数学授業デザイン論』とコラボの形態をとる。栃木県内の教員が、教職大学院生とともに学ぶ機会を作ること、教職大学院の地域への貢献に資することも意図している。

II. 講義内容

<午前の活動>

・ 数学的な見方・考え方について

算数・数学科の目標の確認後、「『数学的な見方・考え方』と聞いて思い浮かぶ言葉や具体的な子どもの姿」について考えてもらった。そして、数学的な推論、統合的に考える、単位の考え等を、具体例を参照しながら説明した。

・ 数学的な見方・考え方の成長を促すための手立て

数学的な見方・考え方の成長のサイクルを示した。また、子どもの内にある見方・考え方の表出、交流、振り返りにおける手立ての重要性とともに、幾つかの例を提供した。それらを手掛かりに、自身の実践を振り返った。

<午後の活動>

・ 数学的活動の事例の考察

数学的な見方・考え方の成長では、数学的活動の設定が重要である。そこで、2つの事例を提示して考察を進めた。1つは、中学校2年の「連立方程式」の内容における「数入れ問題に挑戦しよう」の授業である。ここでは、受講者同士でペアとなり、授業中の活動の一部を実際に行ってもらった。また、授業中の生徒の様子や振り返りにおける記述を示し、生徒の学びの実践を考察した。

もう1つは、小学校5年の「図形の構成」の授業である。ここでは、ねらいや教科書による展開を確認した後、グルー

プになって、受講者にプログラミンによる作図を行ってもらった。さらに、教科書における作図との相違点や、プログラムを作ることを取り入れた数学的活動のメリットなども話し合ってもらい、意見の交流を行った。

・ まとめとアンケート

数学的な見方・考え方では、子どもの中にある見方・考え方を成長させるというスタンスが大切である。そして教師が、数学的に考えている子どもの姿を理解することが大切であること、数学的活動を充実させていくことが大切であることをまとめた。アンケートはGoogle formで行った。

III. 講座の自己評価と受講者の様子

受講者は、小・中学校教員を対象にした。25名の受講者のうち、学外から受講された14名は、1～5年目が3名、6～10年目が5名、11～20年目が3名、21～30年目が3名であった。さらに、教職大学院生9名（現職7名、学卒2名）、内地留学生2名が受講した。また、25名のうち17名が小学校教員であった。このように、経験年数も校種も異なる受講者が共に学ぶ機会となった。

本講座は、昨年度に続いてオンライン開催となった。なかなか対面での開催が出来ないのが残念であるが、予定した内容を行うことが出来た。ペアやグループによる議論も活発に行っていたかと思っている。受講者もオンラインによる研修に慣れてきている印象を持った。

以下、アンケートに書かれた内容を紹介する。

- ・ 見方、考え方を働かせるってどんなことをすれば良いのかなと教科書と睨めっこをしていました。しかし、今回の研修で今やっている授業にひと工夫するだけで、子どもたちの数学的な活動を活発にさせ、見方、考え方を働かせることができるのではないかと思います。
- ・ 具体的な指導場面や、内容などを取り上げて他の先生方と話したり、お話を聞けたりしたので、すぐに実践したいと思った。また、プログラミングについて、苦手意識があったので、お話をきけてよかった。
- ・ Zoomでの研修となりましたが、ペアやグループで考えたり話し合ったりする活動もあり、楽しく研修を受けさせていただきました。

【7】講座名：日英語比較と英語文学の知見を活かした英語の授業づくり

講師：岩崎宏之・五十嵐奈央

実施日：令和4年8月2日（火）

会場：8A33教室

受講者数：26名

I. 講義の趣旨

日本の英語教育において、授業が検定教科書に沿って実施されていることは周知の事実である。そのような状況の中で、大学の英語教員養成課程でもカリキュラムの中に組み込まれている英語学と英語文学は、児童・生徒の英語力を向上させるためにどのような形で取り入れることが最善なのだろうか。両学問領域の知見を活かした英語の授業づくりについて講師から話題を提供し、そのような授業を実践することの意義について考察していただいた。

II. 講義内容

講義は午前の部と午後の部の2つに分け、午前は岩崎、午後は五十嵐が担当した。岩崎は日英語比較をテーマとして取り上げ、個々の音から文という大きなレベルに至るまで、日英語の文法的特徴を考察した。日本語母語話者とはいえ、日本語のことにについて改めて耳にすると、今まで気にも留めなかった事柄に触れることもあり、新たな学びとなる場合がある。私が今回のサマーセミナーで特別支援学校の先生方を対象に含めたのも、このような事情が背景にある。まず『日英語比較1：音声面』と題して講義を行い、実際に先生方に英語のリスニングに取り組んでいただきながら、日英語の違いを体感していただいた。次に、『日英語比較2：文法面』として、語の単位から文の単位に渡って、日本語の事例と英語の事例を比べながら、共通点と相違点に接していただいた。講義を進めていく中で、「この日本語の例は、母語話者の直観として許容されるかどうか」や「この文はどのような意味で解釈されるか」など、日常的に日本語を使用している場面では経験しないであろう質問を先生方に投げかけた。この種の問いに自分なりの答えを見つけていく過程で、ことばに対する意識が高められて、ことばへの気づきを得るための素地が形成される。現場の教育現場において、児童・生徒のことばに対する意識を育むことは、英語学習に対するモチベーションを高めることにも繋がり、極めて重要なことといえる。また、今回の講義を通じて日本語にはない英語の特徴に触れていただいたが、そのような特徴は日本語母語話者である児童・生徒も苦手に感じる可能性が高いため、そのことを事前に想定して工夫を凝らしていくことが、英語嫌いを1人でも減らすための鍵となる。

午後の部では、英語で書かれた文学作品を英語の授業に取り入れるのに必要な「教材選び」「活用方法」「文学作品読解に関わる知識」について、1) 英語の歌と絵本、2) 英語の詩、3) 英語圏児童文学、という3つのジャンルの作品を紹介しながら説明した。小学校・中学校・高校いずれかで実際に活用できそうな作品や活用例を多く挙げただけでなく、同じ作品でも、活用方法を変えれば様々なレベルの英語の授業に応用できることを、実例を交えて話した。また、特に歌や絵本、詩は、英語特有のリズムを学ぶのに非常に有効であり、そのリズムを作っている要素として広く知られている韻や音の繰り返しに加えて、日本の英語教育ではあまり重視されていない韻律について詳しく解説した。児童文学作品については、文学作品を英語の授業で教材として用いる際に教員側が知っておいた方がいい、読解における着目点を『不思議の国のアリス』を例にして紹介した。英語の授業では、言語の知識が最も重要となるが、文学作品を扱う場合は、作品が書かれた時代や文化について知っていると、理解が深まる。英語が苦手な児童・生徒でも、そうした作品の背景を内容とともに楽しむことができれば、英語を積極的に学ぶきっかけに繋がる可能性もある。教材として扱うにしても、作品の面白さを最大限に生かす授業づくりをしてほしいと話した。

III. 受講者の様子・反応

1人での作業、ならびに、コロナ禍での対面開催を考慮して少人数でのディスカッション活動を行ったが、共に積極的に取り組んでいただいた。以下に、アンケートに書かれた記述の幾つかを紹介する。

- ・話を聞いておもしろいと思った。もっと知りたい、知った事を伝えたいと思った。真剣に話をしてもらえて良かった。
- ・このような英語の授業があるといいなと思ったと同時に、自分もこのような授業をしてみたいなと思いました。また、今の大学生はこのような勉強もできていいなと思いました。
- ・今まで習ってきたこともあったのですが、忘れていたところもあったので、改めて復習にもなりました。日本語と英語を比べることもあまりなかったので、新しく学ぶこともできました。英語文学では学校現場で使えるものをたくさん紹介していただき、使ってみたいなと思いました。

【8】講座名：言語活動を軸にした教育内容・方法論

講師：青柳 宏

実施日：令和4年8月3日（水）

会場：オンラインによる

受講者数：12名

I. 講義の趣旨

本講義は、教育活動を「対話」の視点から捉えなおし、児童生徒が他者と対話しながら自己内対話によって自身の思考を深めていくために教師に求められる「資質・能力」を育むことを目的としている。本講義は、いわゆる「講義」ではなく、受講者同士が特定のテーマについての対話を行うことを通して、上記の「資質・能力」を実践的に育み合うことが本講義の趣旨である。尚、本講義は、教職大学院における選択授業「言語活動を軸にした教育内容・方法論」（全15回）中の後半の四回分を当てて行われたものである。

II. 講義内容

本講義は、上に述べたように、大学院の授業の一部を公開したものであり、特に、授業後半（第12回～15回）における院生自身の対話的实践（模擬授業）が主な内容となる。講師（青柳）によるイントロダクションの後、三人の院生による対話的实践を行った。

具体的内容は以下の通りである。

1. 講師（青柳）によるイントロダクション

教師による一方向的な授業様式、すなわち、教師が問いかけ→児童生徒が答え→教師が正誤を評価する、といった授業様式が児童生徒の思考力を育むことに「失敗している」ことを説明し、授業を「対話」化していくことの重要性について説明した。

また、「対話」とは「感じること」、「他者と語り合うこと」、「自己を語ること」の三側面をもつことを説明した。

以上の説明後、「感じる」ことの実践として、谷川俊太郎『ぼく』を教材として、講師が実践を行った。

2. 院生による実践（模擬授業）①：「奈良少年刑務所詩集」を主たる教材として、受刑者（少年）の10篇の詩に係る対話的实践が行われた。

3. 院生による実践（模擬授業）②：著名なおとぎ話「桃太郎」を題材として、「桃太郎」と「鬼」との対話を受講者が行う実践である。また、この実践では、「桃太郎」役（グループ）、「鬼」役（グループ）だけでなく、「桃太郎と鬼の対話についてコメントする」役（グループ）を設定して実践を行った。自分たちの対話に対する客観的なコメントをふまえて、さらに対話していく実践である。

4. 院生による実践（模擬授業）③：『百万回生きたねこ』を教材として、受講者が自身の「人生」を見つめ、これから「どう生きたいか」を語り合う対話的实践が行われた。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

本講座の約四分の三は、上記したように院生による模擬授業の実践であるが、模擬授業の構想段階から講師が係わり、適宜、指導を行った上で実践されたものである。同時に、模擬授業を行った院生は、本講座以前の講師による授業「言語活動を…」の主旨をよくふまえ、それぞれ模擬授業を展開したので、サマーセミナー受講者に対して、「1. 講義の主旨」で述べた目的を概ね達成することが出来たと思われる。

尚、受講者に対する本講座についてのアンケート結果では、「とても満足」がほぼ9割にのぼり、受講者自身が自身の現場で対話的实践を行うための大きな意欲と、具体的な手立てを自身で構想していく力を育むことが出来たと思われる。

以下、本講座についての受講者の自由記述の一部を引用する。

・多くの先生方と、一つの問いに対して、とことん話し合えてとても楽しかったです。様々な考えに触れ、新しい視点を知ることの喜びを感じました。主体的、対話的な深い学びについて、漠然としか理解をしていなかったのですが、対話的に学ぶを実感できました。また、対話するからこそ世界が広がり、自分自身の考えが深まったり、新たな疑問がわいたり、主体的な学びにつながるのだと思いました。本当に貴重な時間をありがとうございました。

・授業や特別活動の中で自由に言語活動を行うことの効果を実感することができた。また、そのための雰囲気作りや発言を促す工夫についても学べた。

・このようなセミナーがあることをほかの教員にも勧めたい。言葉にすることや、考えをまとめることが思うようにできなかったのも、私ももっと学びたいと思った。非常に有意義な研修だった。

・温かい雰囲気の中、研修を受けられました。とても充実したオンライン研修でした。ありがとうございました。来年を楽しみにしています。

【9】講座名：学校改革の実際と課題－SWOT/クロス分析を手がかりに学校の力を掘り起こそう－
講師：小野瀬 善行
実施日：令和4年8月5日（金）
会場：オンラインによる開催
受講者数：27名（16名は教職大学院生）

I. 講義の趣旨

本講義の趣旨は、学校経営マネジメントのひとつの手法であるSWOT/クロス分析に注目し、その有用性や課題を確認しながら、学校改革に主体的に取り組む若手教員、ミドルリーダーの育成を目指すものである。尚、本講義は教職大学院とのコラボ講座であり、教職大学院生16名とサマーセミナー参加者11名が共同で学んだ。新型コロナウイルス（COVID-19）感染症対策のためオンライン開催に変更した。

II. 講義内容

以下のような時間設定で講義、演習や交流を実施した。

①「いま、学校組織マネジメントが何故求められるのか。」（9：40～10：40）

学校が置かれている社会的環境について理解を深め、学校運営において「最適解」や「納得解」を適切に導き出し、それらを「自分事」として主体的に取り組む体制の構築が必要であることを確認した。

②「自校が担う役割と使命（ミッション）について」（演習）（10：50～11：30）

学校を取り巻くステークホルダーを洗い出し、それぞれが学校にどのような要望を持っているのかについて整理し、その要望に誰がどのように応えることができるのかについて分析を行った。

③「SWOT/クロス分析について（理論編）」（11：30～12：00）

SWOT/クロス分析とはどのようなものかについて説明を行い、各自、自分の勤務校を念頭に置きながら、まずはSWOT分析を行うこととした。

④「SWOT/クロス分析について（演習編）」（13：00～14：00）

自らの勤務校についてSWOT/クロス分析を行ったものについてグループで共有し、各自の観点などを確認することとした。

⑤「SWOT/クロス分析を通じた学校経営改革の実践」（14：10～15：30）

足利市立富田中学校勤務の國定佑基教諭（令和3年度教職大学院修了生）をゲストスピーカーに招き、SWOT/クロス分析を校内研修に導入した事例を紹介いただき、その事例を踏まえて校内研修改革への適用可能性について確認、議論をした。

⑥「全体のふりかえり」（15：30～16：00）

本時の内容を振り返り、参加者からの感想を共有した。

III. 講座の自己評価と受講生の様子

当日は、教職大学院生16名に加え、県内の小学校、中学校、特別支援学校より11名の参加があった（1～5年目が2名、6～10年目が3名、11年目から20年目が1名、21年目から30年目が4名、中堅教諭等資質向上研修3名、5年目研修1名、初任者1名等）。多様な校種、勤務経験であったが議論は大変活発に行われた。全体的な評価も概ね好評であった。

以下、アンケートに書かれた主な記述を引用する。

- ・10年目研修の選択研修として参加しました。学校組織マネジメントの一環としてswot分析の方法を学ぶことができた事、沢山の先生方との対話ができたとこなど、とても有意義な時間でした。注意点を意識しつつ、気軽に取り組んでいきたいと思いました。
- ・マネジメントとして、SWOT/クロス分析の手法を知ることができて良かった。自校の強み、弱みを考える機会もなかったので、今日出てきた内容以外にも、今後考えられるきっかけになるのではと思います。是非、先生方を巻き込んで実践してみたいと思います。
- ・オンラインの研修となりましたが、資料の配付や、細かい説明等大変ありがとうございました。画面共有により、視覚的にポイントを押さえられたことは良かったのではと思います。

【10】講座名：障がいの重い子どもと係わり合う教育 —実践事例から読みとく特別支援教育—

講師：岡澤 慎一

実施日：令和4年8月8日（月）

会場：宇都宮大学8号館C棟2階大会議室

受講者数：31名

I. 講義の趣旨

本講座では、障害の重い子どもとの教育実践から、教育の本質について学ぶ意志のある人を対象として、重複障害教育における実践研究の現状と課題について、事例研究論文や映像資料を用いながら解説したり、受講生相互に協議したりした。今回は、実践事例の蓄積が少なく、実践的見識の共有が容易ではない、超重症児との教育的係わり合いを検討した。なお、超重症児とは、継続的で濃厚な医療的ケアを必要とし、重度の肢体不自由がある子どもである。

II. 講義内容

当日の進行は以下のとおりであった。

午前（9時30分～12時15分）

- ・オリエンテーション／超重症児との教育的係わり合い
- ・実践事例紹介①：Sさんの表出を確定し意味の共有を試みた教育的係わり合い
- ・グループによる振り返り①

（昼休み）

午後（13時15分～16時00分）

- ・実践事例紹介②：身体の動きが極めて制限されるKさんと重ねた学習は何を育んだか
- ・グループによる振り返り②／まとめとアンケート

以下、内容ごとに順を追って簡単に説明する。

まず、「超重症児との教育的係わり合い」について検討した。超重症児への対応について、医療的ケアや種々のリハビリテーションに焦点化されるあまりに、教育活動やその基盤となるコミュニケーションのあり方にまで十分には思い及んでいないのではないかと。また、超重症児に対する学校教育の現場では、その時間の多くが、医療的ケアや排せ、衣服の着脱、衛生などの様々な身辺処理活動のケアや介護などへ費やされている。こうした状況のなか、教育活動、特にその根幹をなすべき学習活動へ取り組みが相対的に希薄になっており、そのあり方を模索することは重要な課題の一つであること（土谷・菅井・岡澤・中村・笹原，2013）が確認された。

続いて、筆者自身の取り組みによる教育実践事例を、午前に1事例、午後に1事例紹介し、事例ごとにグループに

よる振り返りを行なった。グループは、参加者の所属する学校種が偏らないように事前に編成した。ここでは、紙幅の都合から、実践事例紹介①の概要についてのみ述べる。

本児は、係わり手が出会った当初5歳の女兒でその後、約12年間にわたって教育的対応を重ねることができた（岡澤，2020）。本児は、気管切開し常時人工呼吸器を使用、経管栄養、寝たきりの状態であった。不快様の表情や発声も見出される。四肢の運動は、痙攣様の動きが散見されるが、それ以外に肉眼で表出を確認できる自発的なものは見出し難い。こうした本児と、本児の右手の動きの表出に基づいた共同的な活動を係わり手と重ねていくなかで、本児と係わり手との間で本児の右手の動きの意味が共有され、自発的で意図的な動きが促進された。本児の手・腕の動きの拡大経過は、本児の表出につぶさに対応する係わり手との相互調整から本児が自身の手の動きを自発的に発現し調節する自己調整に至る過程とみることができよう。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講生31名の内訳は小学校12名、中学校2名、高校1名、特別支援学校16名であり、多くの人が大変熱心に聴講した。「満足度」の結果（「とても満足」が27名、「やや満足」が3名、「とても不満」が1名）とアンケートの結果における自由記述（「事例をもとにわかりやすい講義内容だった。グループの協議もとてもよかった」、「通常学級を担当していますが、今回の件、内容は通常に生かせることとばかりでした」、「日頃、重度心身障害児と関わる中で、“教育の本質”、“教員の専門性”について考えさせられていましたが、岡澤先生のかかわり合いの記録、その裏にある思いを聞くことができ、大変参考になりました」、「重度重複障害の子どもたちに日頃接しているため、岡澤先生の実践に触れることで、自分の考えや取り組みを十分に振り返ることができたからです。子どもたちの力を信じて実践を重ねる係わり合いを私も今後大切にしていきたいと改めて感じました」など）を見れば、本講座は概ね好評であったといえる。本講座で今回使用した映像資料のすべてが講師自身の教育実践によるものであり、そのことが講話の内容にも一定程度の説得力を与えているように思われる。今後も自分自身の教育実践研究を推し進め、実践的見識を蓄積し、現場の先生方と対応なパートナーとして語り合えるような研究者を目指していきたい。

【11】講座名：ICTを活用して地球を探究する

講師：瀧本 家康

実施日：令和4年8月9日（火）

会場：基礎地学実験室等

受講者数：6名

1. 講座の目的

本講座では、実験や実習が実施しにくいとともに、現職の理科教員でも指導しにくいと感じている地学領域について、ICTを活用した探究活動の一例を紹介し、実際の授業等で活かしてもらうきっかけとなることを目的とした。ここ数年では特にコロナ禍によるオンライン授業の充実、また、GIGAスクール構想の進展による個人による端末の利用などICTの活用場面は急速に広がっている。そのような中で、インターネット上における教育上有用なツールやアプリ、サイトも数多く存在し、それらを活用することで、これまで以上に地学領域の探究活動の実施が容易になった。そこで、本講座では、地学領域の中でも特に、最も基本的ともいえる「地球」に焦点を当て、さまざまな視点から「地球」を体感的に理解することを目指した。

2. 講座の概要

本講座は、受講者自身にPCやタブレット等を持参してもらった上で、以下のような探究課題に取り組んだ。

- (1) 地球の大きさ測定
- (2) 地球の形に関する探究
- (3) 大気圧の変化測定
- (4) 岩石密度測定
- (5) 地球内部構造の再現

(1) 地球の大きさ測定

国土地理院による「地理院地図」を活用して、室内で地球の大きさを求めることができる探究活動を行った。地理院地図は地理や地学で非常に有用な地図サイトであり、また、授業に限らず日常生活でも活用できる場面が多々あることから受講生にぜひ知ってもらいたいツールである。ここでは、地理院地図上で2地点間の緯度差と距離を測定し、その結果から、地球の大きさを概算することを行った。

(2) 地球の形に関する探究

地球の形は一般的にほぼ球であると考えて良いが、実際にはやや赤道方向につぶれた楕円体をしている。その差はわずか20km程度であるが、その違いにより、同じ緯度差1°にた

対する地表面上の距離は低緯度と高緯度で異なる。ここでは、地理院地図上で九州と北海道で同じ緯度差に対する2点間の距離を測定し、その違いから地球の形について考察した。

(3) 大気圧の変化測定

スマートフォンにインストールした無料アプリを活用して、日常的に体感しにくい大気圧を実際に測定することで、気圧差から高度差を求めることができることを体験した。

(4) 岩石密度測定

地球を構成する主な岩石標本を用いて、その密度を測定することを通して、地球内部の層構造の成因を考察した。また、日本の城の石垣に使われている大きな石材をテーマとして、昔の人はそのような質量の大きな石材をどのように運搬していたかについて実験を通して考察した。

(5) 地球内部構造の再現

地球内部は、構成する物質の密度の違いによって“ゆで卵”のように層構造をなしている。この層構造を水と複数の油を用いることによって再現した。



3. 実施結果

受講者は結果的に少人数であったが、そのことにより個々の受講生とも十分なコミュニケーションを取ることが可能となり、結果的に受講者の満足度も概ね良好であった。

【12】講座名：幼児・児童・生徒ひとりひとりの手持ちの力を尊重し育むための教育を 考えてみよう

講 師：石川 由美子・齋藤 大地

実 施 日：令和4年8月22日（月）

会 場：共同教育学部7棟1階 ティーチングコモンズ

受講者数：18名

I 本セミナーの趣旨

幼児・児童・生徒が“この今”自身の手持ちの力を
使って充実して生きることができる環境（対象としての
人やモノ）を教育の場に整え共に生き合う。その先にや
っと“できる（自立）”を基盤とした子ども自身の主体
的な活動の可能性がみえてくるかもしれないのであつ
て、“できるようにさせる”ための教育目標と手段が“
自立”の前に敷かれる唯一の文脈(状況)ではないだろう。

（子どもも教師も）ひとりひとりの手持ちの力で“こ
この今”を生き合うことができる教育という視点から、
教育を考えるための対話的セミナーを主催する。

II 講義概要

1. エピソード(1)：手持ちの力の観点をエピソードで 紐解く

スピノザの「衝動」の概念を用い「我々としてあるこ
とをなさしめる目的なるもの」から、手持ちの力の定義
づけを行った。その後ある「小学校教員のエピソード」
を用い手持ちの力の観点について解説を加えた。

うちの学校の1年生は、毎朝、自分の朝顔の鉢に水をあげます。
たっぷり500ml。毎朝です。

前日土砂降りだった時もたっぷり、きっかり500ml。

その様子を見て、これって考えてないよねって思いました。

担任から毎朝水をあげますよと、教わったからその通りステレ
オタイプに実行しているだけ。土が濡れているのが、乾いてよう
が、関係ない。水をあげるという担任に課せられたプログラムを
実行しているのみ。

それに対して、そのクラスの担任ではない私が、「昨日、土砂
降りだったよね、朝顔、お水でおなかいっぱいなんじゃないの？」
と突っ込みを入れると、子どもたちは大混乱。だって、担任の先
生にそんなこと言われたこともないから。

これって怖いことかもしれません……。

2. エピソード(2)：参加者自身のエピソード記述から

5グループに分かれた参加者のエピソードをまずは、そ
れぞれが語り、それぞれが傾聴する。そして問うてみた

いと思ったことを相手に素直に問う、という対話の時間
を体験した。

その後、学校全体として考える必要があること、クラ
スとして取り組む必要があることなど、手持ちの力をお
互いに使いながら生き合うために必要な観点を語りまと
め、さらに他のグループに語り伝える時間を体験した。

3. エピソード(3)：講師自身の実践エピソードを聞いて みよう

高等部3年生(知的障害特別支援学校)、ダウン症、男
子。I型糖尿病の自己管理行動に関するエピソードを紹介
し、自己管理行動をどのように促していけばよいのか
について語り合う(齋藤大地)。

III 講座に関する参加者の評価と講師側の学び

9時半から16時までの時間があっという間に感じられ
た。参加者の学ぶ意欲と熱気が伝わってくる感覚をそれ
ぞれの講師が感じていた。この感覚は、参加者のアンケ
ート結果の満足度の評価の高さと一致するものではない
かと思われる(1とても満足15名、2やや満足3名)。こ
の評価に至る要因は、以下にまとめた自由記述で推し
量ることができた。

1. 「子どもの手持ちの力」って何だろう？と思っていた
ことが講義やグループでの話し合い発表を通して理解
することができた。
2. 様々な事例を聞くことができたり、自分の悩みを聞いて
もらえたりして、心が軽くなりました(私だけじゃな
いんだ！と思えました)。
3. 自分にはない新たな視点を得られた。また、今後職務
と向き合う際に考えていきたい課題も見つかり有意義
だった。

以上から、講師側もセミナーの実施方法として、対話型
セミナーの有効性を実感した。

令和4年度教職員サマーセミナー アンケート			●
教職員サマーセミナーにご参加いただき、ありがとうございました。 今後の本セミナーの改善に資するため、参加された方々から率直な意見をいただきたく、以下のアンケートにご協力くださるようよろしくお願いいたします。 宇都宮大学教職センター 楕円は鉛筆を使い完全に塗りつぶしてください。各質問に一つだけ選んでください。			
1.ご自身について教えてください。			
(1)年齢 ①20歳代 ②30歳代 ③40歳代 ④50歳代 ⑤その他	1	① ② ③ ④ ⑤	
(2)教職経験年数 ①1-5年目②6-10年目③11-20年目④21-30年目⑤31年目-	2	① ② ③ ④ ⑤	
(3)勤務学校種 ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④特別支援学校 ⑤その他	3	① ② ③ ④ ⑤	
(4)サマーセミナーの受講歴 ①初めて ②2回目 ③3回目以上	4	① ② ③	
2.本セミナーの開催を最初に知ったきっかけについて教えてください。			
①勤務している学校等に配布されたポスター・パンフレット	5	① ② ③ ④ ⑤	
②総合教育センターでの研修			
③総合教育センターや宇都宮大学のウェブサイト・SNS			
④同僚、友人、知人の紹介			
⑤その他			
3.今回受講された講座の内容はいかがでしたか。			
(1)満足度 ①とても満足 ②やや満足 ③やや不満 ④とても不満	6	① ② ③ ④	
(2)上記3(1)の理由			
4. その他（広報、研修内容など）についてご意見がありましたら、ご自由にお書きください			
●			●

令和4年度 教職員サマーセミナー 実施アンケート（受講者） 集計表

申込者数	221人
受講者数	202人
アンケート回答数	189人
アンケート回収率	93.6%

1（1）年齢

区分	人数	割合(%)	備考
① 20代	51	27.0%	9.8%
② 30代	74	39.2%	55.6%
③ 40代	52	27.5%	21.8%
④ 50代	11	5.8%	10.5%
⑤ その他	1	0.5%	2.3%
回答無し	0	0.0%	0.0%

1（2）教職経験年数

区分	人数	割合(%)	備考
① 1－5年目	61	32.3%	10.5%
② 6－10年目	65	34.4%	49.6%
③ 11－20年目	37	19.6%	24.1%
④ 21－30年目	17	9.0%	7.5%
⑤ 31年目－	8	4.2%	8.3%
回答無し	1	0.5%	0.0%

1（3）現在の勤務学校種

区分	人数	割合(%)	備考
① 小学校	87	46.0%	57.9%
② 中学校	38	20.1%	21.1%
③ 高等学校	23	12.2%	9.0%
④ 特別支援学校	41	21.7%	11.3%
⑤ その他	0	0.0%	0.0%
回答無し	0	0.0%	0.8%

1（4）サマーセミナーの受講歴

区分	人数	割合(%)	備考
① 初めて	124	65.6%	60.2%
② 2回目	31	16.4%	20.3%
③ 3回目以上	34	18.0%	19.5%
回答無し	0	0.0%	0.0%

2 開講に関する情報の入手方法

区分	人数	割合(%)	備考
① 勤務している学校等に配布されたポスター・パンフレット	90	47.6%	50.4%
② 総合教育センターでの研修	54	28.6%	36.8%
③ 総合教育センターや宇都宮大学のホームページ・SNS	27	14.3%	3.0%
④ 同僚、友人、知人の紹介	13	6.9%	4.5%
⑤ その他	5	2.6%	5.3%
回答無し	0	0.0%	0.0%

3（1）受講満足度

区分	人数	割合(%)	備考
① とても満足	152	80.4%	81.2%
② やや満足	33	17.5%	18.0%
③ やや不満	3	1.6%	0.8%
④ とても不満	1	0.5%	0.0%
回答無し	0	0.0%	0.0%

※備考の数値は令和3年度の割合(%)である。